「胚胎期」ロシアにおける「統治理念」
―「ロシアとヨーロッパ」問題について―[1]

栗生沢　猛　夫

はじめに
Ⅰ　ロシア史の根本問題としての「ロシアとヨーロッパ」
Ⅱ　キエフ時代（９-13世紀初）―「ロシア（ルーシ）とヨーロッパ」関係の成立
Ⅲ　モンゴル支配期（13-15世紀）―ロシアは「モンゴル化」したか
Ⅳ　モスクワ大公国の時代（14/15-17世紀）―「モスクワ・モンゴル継承国家論」の是非
Ⅴ　展望

はじめに

近世ロシアにおける「統治理念」という場合、具体的にどのようなことが問題となるのであろうか。「正教」キリスト教を奉ずるロシア君主が統治に際し自ら依拠し、それにより導かれた理念ということであるならば、いわゆる「王権神授説」に基づく「モスクワ的専制」理念について問うべきであるかもしれない。あるいはかつて帝政期ロシアの歴史家によって論じられ、その後第二次世界大戦後の「冷戦」期にとくに欧米の研究者の間で大きな注目をあびた「モスクワ・第三ローマ」論のごとき理念をとりあげるべきなのかもしれない[2]。

1　本稿は人間文化研究機構「北東アジア地域研究推進事業」、島根県立大学 NEAR センター拠点プロジェクト「近代的空間の形成とその影響」、第１回国際シンポジウム 2016【北東アジア：胚胎期の諸相】（2016年11月19日）における発表原稿を基に執筆された。筆者には問題意識においてこれと重なる、並行して執筆された別稿がある。合わせてお読みいただければ幸いである（拙稿「ロシア中世の世界―年代記編纂の歴史から、とくに『絵入り年代記集成』について―」、『秋大史学』63号、2017年３月、1-30頁）。

2　「モスクワ的専制」理念は、たとえば、イヴァン雷帝の「クールプスキー公にあてた書簡」に典型的な表現を見せている。そこにはロシアにおける最初の政治亡命者とも言うべき同公(雷帝にとっては「裏切り者」にほかならない）にたいする雷帝の非難の言葉が書き連ねられるが、かれが皇帝（ツァーリ）権力をどのように認識していたかがよく表現されている（拙訳「イヴァン雷帝とクールプスキー公の往復書簡試訳（Ⅰ-Ⅲ）」、『人文研究』（小樽商科大学）、第72、73、74輯、1986-1987年）。また「モスクワ･第三ローマ理念」について詳しくは､拙稿「モスクワ第三ローマ理念考」（金子幸彦編『ロシアの思想と文学』、恒文社、1977年、９-61頁）、および拙稿「モスクワ第三ローマ以前」（『えうゐ』６号、1979年、41-51頁）を参照されたい。後者には、この理念を最初に表明したとされる修道士フィロフェイの書簡の拙訳が含まれる。

しかし本稿が検討の対象とするのは、そうした理念自体ではなく、むしろその基盤に横たわる、あるいは背景をなすと考えられる思想的、心理的態度の問題である。これによってロシアにおける多様な「統治理念」を貫く根本的な規定要因を長期的視野に立って明らかにすることができると考えるからである。

課題をこのように設定した場合、ただちに念頭に浮かんでくるのは「ロシアとヨーロッパ」をめぐる問題である。この問題がロシアにとりいかに重要であったか、それが具体的にどのようなものであったかについては、次節以下に示されるが、西方で目覚ましい発展を遂げつつあった「ヨーロッパ」に対しどう向き合うかは、いつの時代にあってもロシアの為政者や知識人の心を捉えて離さない重大な問題であったのである。

本シンポジウムの主題は「北東アジア」であるが、これと一見して無縁なテーマをとりあげる理由は、ロシアが何よりも「ヨーロッパ」東部にあって、それとの密接な関わりの中で自らの歴史を開始したからである。最初期のロシア（キエフ・ルーシ）が、形成途上にあった「ヨーロッパ」の中核地帯から遠く、いわば東辺境に位置したとはいえ、それと緊密に結びつく重要な存在であったことに留意する必要があるのである。一方でロシアが自ら積極的主体的にアジアに関与するようになるのは、その中心がモスクワに移ってしばらくした16世紀以降のことである。近代ロシアをアジアとの関連で考察するに際しては、さまざまな接近法が考えられるが、ロシアは、とりわけヨーロッパ諸国と比較した場合、中央権力が並外れて強力であり、他方で「地域主義」的要素の展開がきわめて限定的であったので[3]、つまりはそのアジア部分だけを中央部から切り離して考えることが適切でないことが明らかであるので、まずは中核部（ヨーロッパ・ロシア）について検討する必要がでてくるのである。ロシアにとって本質的意味をもつ「ロシアとヨーロッパ」問題の考察は、次第に重要性をおびることになる「ロシアとアジア」問題の理解に少なからぬ示唆を与えることになると考える。

「胚胎期」はシンポジウム企画者によれば、17-18世紀であるが、ここでは以上のごとき

３　ロシアにおける中央権力（専制）に対する対抗的要素、ないし抑止力としての「地域」ないし「地方」の問題、いわゆる「地域主義　Regionalismus」の問題は、ロシアをヨーロッパ（諸国）と比較考察しようとするすべての研究者にとって重大な論点であった。ロシアをヨーロッパと異質の存在と考える研究者は、ロシアにおける「地域主義」の欠如を説くか、あるいはその展開を不十分とみる傾向にある。本稿の筆者は、ロシアとヨーロッパの異質性を過度に強調することには反対であるが、ロシアにおいて「地域主義」が脆弱であったことは否定できないと考えている。ヨーロッパとロシアの歴史における「地域主義」およびこれと密接に関係する貴族など王権に対峙する「諸身分」をめぐる問題については、さしあたり以下を参照。D.Gerhard, Regionalismus und ständisches Wesen als ein Grundthema europäischer Geschichte. *Historische Zeitschrift.* 174(1952), S.307-337; G.Stökl, Gab es im Moskauer Staat ‘Stände’? *Jahrbücher für Geschichte Osteuropas*（この雑誌は以下 *JbfGO* と略記する）. 11(1963), S.321-342、さらに拙稿「ロシアにおける『身分制』および『封建制』の問題」、『スラブ研究センター研究報告シリーズ　55』（1994年）、1-18頁

理由から、近代以前の時期に焦点を合わせることになる。「ロシアとヨーロッパ」問題がロシアにおいていかなる経緯で現れ、どのような展開を見せてきたかについて明らかにしたいと考えるからである。その後の時代については若干の展望を示すにとどめたい。

Ⅰ　ロシア史の根本問題としての「ロシアとヨーロッパ」

ロシアの為政者にとって、圧倒的先進地域であるヨーロッパ（それはロシアに対し友好的でも敵対的でもありえた）を相手にいかなるスタンスで接するか、これといかなる関係を取り結ぶかは、最大関心事のひとつであった。この問題はロシアのみならず、日本をも含む他の後発地域にとっても同じく想定されるが（その意味では普遍的な問題である）、「ヨーロッパ」に隣接し、既述のとおり、まさに「歴史的ヨーロッパ」の形成期に歴史を歩み始めたロシアにとっては、とくに大きな問題として立ち現れた。

ロシアが「ルーシ」という呼称の下に歴史の舞台に登場するのはおよそ紀元９世紀と言ってよいが、そのころ西方ではすでにゲルマン諸国家が建国を終えており、「中世ヨーロッパ」がまさにその特徴的な姿を現わそうとしていた。ロシアは何世紀か遅れて歴史の舞台に登場したのである。後発国ロシアにとって、その歩むべき道を指し示すのは唯一、ヨーロッパのみであった。こうした認識から生じる複雑な感情は、ロシア史の最初から、「ヨーロッパ」の意味が改めて厳しく問われている今日に至るまで、変わらずに続いている。「ロシアとヨーロッパ」間に容易に解消しがたい問題があることは、ロシア人自身においてはもとより、ヨーロッパ諸国からの来訪者（かれらの多くは何らかの「記録」を残した）やその後の研究者においても、表出の仕方はさまざまであったにせよ、強く意識されてきたのである[4]。

4　ロシアではピョートル一世以後、とりわけナポレオン戦争後、知識人の間で「ロシアとヨーロッパ」問題が強く意識された。19世紀知識人の間で行われた「スラヴ派」と「西欧派」の論争もその表れである。また生物学者であったダニレフスキーは『ロシアとヨーロッパ』を著して（N. Ia. Danilevskii, *Rossiia i Evropa.* 単行本としては1871年刊）、ロシア人を中心とするスラヴ人の歴史文化をロマン・ゲルマン人のそれに対峙させ、前者の優位性、将来性を説いた。それは後にわが国でもよく知られる『西洋の没落』の著者 O. シュペングラーにも一定の影響を与えたことが指摘されている（鳥山成人『ロシアとヨーロッパ：スラヴ主義と汎スラヴ主義』、白日書院、1949年。O.Spengler, *Der Untergang des Abendlandes,* 1918, 1922）。また後に独立チェコスロヴァキア初代大統領となる T.G. マサリクもロシアにおける精神的潮流にかんする自身の研究をこのタイトルの下に出版した（1913年、石川達夫、長與進訳『ロシアとヨーロッパ』、成文社、2002-2004年、全三巻）。さらにダニレフスキーの思想を論じた邦語文献（鳥山成人の上掲書）、また「西欧主義とスラヴ主義」をめぐる論争状況をわが国で初めて本格的に論じた勝田吉太郎『近代ロシヤ政治思想史』（創文社、1961年）などを参照。R.Wittram, *Russia and Europe.* London, 1973 はロシアとヨーロッパの関係史を通時的に概観していて便利である。前近代におけるこの問題の現れ方に力点をおいた研究文献については、後述、本稿注35を参照。

ただし両者の関係が時代によってニュアンスを変えていることには注意が必要である。すなわち、初期にはもっぱら「ロシアとヨーロッパ」の並立状態、両者間の交流関係が基本であったが（もちろんヨーロッパの側にイニシアティブのあったことは否定できない）、やがて、とくにモスクワが成長しロシアの中心となって以降、次第に「ロシアかヨーロッパか」という対峙的視点が顕著になり、ロシア帝国期においては、時にあからさまに対立する事態となり（ナポレオン戦争、とりわけクリミア戦争）、最終的にソヴィエト国家成立後、とくに冷戦期以後は、双方の関係は真っ向から対立する事態にまで立ち至ったように思われる（「ロシア対ヨーロッパ」関係の出来）。その間「ヨーロッパ」の意味も当然のことながらその内実を大きく変えている。それは今日では「欧米」ないし「西洋」、「西側」という意味合いを強くし、いわば狭義から広義のそれへと変化したのである。

Ⅱ　キエフ時代（9-13世紀初）―「ロシア（ルーシ）とヨーロッパ」関係の成立

ロシアの建国はおよそ紀元９世紀後半のことと考えられる。最古の年代記『ロシア原初年代記』（『過ぎし年月の物語』ともいう）によれば、862年ごろ「海の向こう」からリューリクら三兄弟が招かれ、北部ロシアに君臨したが、やがて単独支配者となったリューリクがその20年後に南下してドニェプル川中流域にキエフ公国を樹立したという（いわゆる「ヴァリャーギ招致物語」ないし「リューリク招致伝説」）。これはあくまでも伝説であるが、キエフ公国がこのころに成立したこと、また建国に際し北方から来た「ルーシ」が主要な役割を果たしたことは、今日ほぼ大方の研究者の承認するところとなっている。

キエフ国家はその後10世紀末にビザンツ（東ローマ）帝国からキリスト教（ギリシア正教）を導入し、主にそのことからビザンツ文明圏に属す一国家とみなされるようになった。ただし、こうした「通説」は間違いではないが、大きな誤解を生むことにもなった。ロシアの研究者のなかにもこのような見方をする者は少なくないが、とくに欧米の歴史家の場合にこれは顕著であった。かれらはそれによりロシアがそもそもの初めから「非ヨーロッパ的」、ないし「東方的」存在であったことを強調したのである。

これにたいし本稿の筆者は、ロシアが最初期から「ヨーロッパ」と密接な関係にあったことを忘れるべきではないと考えている。キエフ・ルーシは「ヨーロッパ」の東辺境に位置するものの、ときにその内的存在でもあったことに、とくに留意する必要があるということである。

キエフ国家がヨーロッパと強い結びつきを有していたことは、さまざまな局面において示すことができる[5]。先の「リューリク招致伝説」自体がそれを物語っている。そこにいわれる「海の向こう」の「海」はバルト海を指すことが明らかで、そこからやってきたと

5　以下本節の論述は、拙著『≪ロシア原初年代記≫を読む―キエフ・ルーシとヨーロッパ、あるいは「ロシアとヨーロッパ」についての覚書』（成文社、2015年）に依拠している。

される「リューリク」が伝説的人物であるにしても、かれを含む「ヴァリャーギ」と呼ばれる人々は実際にスカンディナヴィア方面からの到来者であった。当時はヴァイキングの時代であり、その一部は東方ルーシ方面へ向かい、そこで「ヴァリャーギ」と呼ばれたと考えられるのである[6]。キリスト教受容（「ルーシの洗礼」）の問題についても同様である。上述のように、従来は「ビザンツ」からの導入という点が強調されていた。徐々に顕在化してきたラテンとギリシア文化圏間の相違と対立、あるいはカトリックとギリシア正教との異質性が指摘されたのである。しかしローマとコンスタンティノープルに中心をおく二つの教会が分裂し、決定的に対立するにいたるのは11世紀半ば以降のことで、キリスト教を受容した当時のキエフは「ギリシア（東方）正教」というより、「キリスト教」を受容したと考えるべきなのである。この時点で「正教」という要素を過度に強調することは、非歴史的とのそしりをまぬかれないであろう。

キエフ国家とヨーロッパ諸国の間には政治経済、宗教文化的に活発な交流があった[7]。キエフ・ルーシの交易路に関しては、従来とくに「ヴァリャーギからギリシアへの道」、すなわちルーシを南北に貫く道の重要性が強調されていたが、近年これと並んでルーシを東西に結び付ける「ドイツからハザールへの道」の存在も注目されている[8]。

ルーシとヨーロッパとの緊密な関係を物語る一つの例としてここでとくに注目したいのは、キエフ大公家とヨーロッパ諸王家・貴族家門との間の活発な婚姻関係である。キエフ大公家は、ビザンツ帝国はいうまでもなく、北欧諸国、ポーランド、チェコ、ハンガリー、神聖ローマ帝国をはじめとするドイツ諸国、さらにはフランスの諸王家・貴族家門と婚姻関係で結びついていた。今日60を超える事例が知られている[9]。キリスト教が国教とされた10世紀末から12世紀30年代までの150年間にキエフ大公位に座したのは９人であるが、そのほぼ全員がキリスト教国（ビザンツを含むが、圧倒的に西方カトリック諸国）から妃を迎えていた。とりわけ重要なのがヤロスラフ賢公（大公在位1019-54年）とその子・孫らの場合である。ヤロスラフ自身がスウェーデン王ウーロヴ・シェートコヌングの娘インギゲルドを妻に迎えていた。かれの子（対象となるのは７人）のうち婚姻関係が判明して

6 「ヴァリャーギ」にかんしては、拙著『≪ロシア原初年代記≫を読む』604-630頁（第十章１節のi）を参照。筆者にはさらにこれを補足、展開する目的をもつ拙稿「＜ヴァリャーギ＞とは何か―キエフ・ルーシにおけるスカンディナヴィア人、問題の再考―」がある（未刊）。

7 ヨーロッパとの密接な関係という視点からキエフ・ルーシ史を見直そうという動きは、近年の Ch. Raffensperger, *Reimagining Europe: Kievan Rus'in the Medieval World.* Harvard University Press, Cambridge, Mass., London, 2012においてもみられる。

8 A.V.Nazarenko, *Drevniaia Rus' na mezhdunarodnykh putiakh. Mezhdistsiplinarnye ocherki kul'turnykh, torgovykh, politicheskikh sviazei IX-XII vekov.* M., 2001, s.71-112. なおハザールとは、７世紀ごろからカスピ海北岸にあったトルコ系国家で、初期キエフ・ルーシ国家を支配下においていた。

9 拙著『≪ロシア原初年代記≫を読む』658-711頁

いるのは６人であるが、それぞれポーランド、ハンガリー、ドイツ、ノルウェー、フランスそしてビザンツの王（皇）族と結婚していた。なかでも娘の一人アンナはフランス、カペー朝のアンリ一世（在位1031-60年）の再婚相手であり、かの女は三人の子（フィリップ、ロベール、ユーグ）の母であった（そのうちフィリップは父の後を継いで王位に就いた）。またヤロスラフの孫の世代も重要である。とくにエウプラクシヤはヤロスラフの子フセヴォロド（大公1078-93年在位）の娘であるが、神聖ローマ皇帝ハインリヒ四世（1056-1106在位）に嫁いだ（両者ともに再婚であった）。この注目すべき結婚はエウプラクシヤ本人にとっては大きな悲劇、他方ローマ教皇との間で叙任権闘争の真っただ中にあった神聖ローマ皇帝にとっては一大スキャンダルとして記憶されているが、ここで詳細に立ち入るわけにはいかない。いずれにせよ、当時のヨーロッパにおいてキエフの公子公女が相当の役割を演じていたことは注目されてよい。言うまでもなくこうした活発な婚姻関係はキエフとヨーロッパ諸国家、諸王家間に共通の宗教的文化的基盤があって初めて可能となった。それは当時キエフがヨーロッパ外的というより、内的存在であったことを如実に示しているといえよう。

Ⅲ　モンゴル支配期（13-15世紀）―ロシアは「モンゴル化」したか[10]

ロシアは13世紀40年代からモンゴルの支配下におかれる。チンギス・カンの孫バトゥ麾下のモンゴル軍が13世紀30年代後半大規模な「征西」に乗り出し、40年代初めヴォルガ川下流域のサライを本拠にキプチャク・カン国を樹立して（ジョチ・ウルス、ロシアの年代記では通常「オルダー」と呼ばれる）、ロシア諸公国を支配下においたのである。この支配は15世紀の80年代まで続いたとみることができる。このころロシアの西隣りにはリトアニアとカトリックのポーランドが屹立していた。両国はモンゴル支配に服すことなく独立の存在を維持していたが、14世後半にはヨーロッパで最後まで独自の民族宗教を守り続けたリトアニアがカトリックを受け入れ、ポーランドとの間に合同国家を形成した（クレヴォの合同、ヤギェウォ朝の成立）。この両国が西方諸国との交流を志向するロシアの前に、さながら「ヨーロッパの防波堤」のごとくに立ちはだかる。かくてモンゴル支配下のロシアは「ヨーロッパ」から切り離され、その結果、この時期のロシアにとってはあたかも「ロシアとアジア」（正確には「ロシアとモンゴル」）が根本問題となったかのごとくであった。

問題は、はたしてロシアはこのとき「モンゴル化」したのかということである。歴史家の多くがこの問いに対し、ニュアンスはさまざまであるが、肯定的に回答する。欧米の研究者の場合、意識的かどうかはともかくとして、この立場に立つことが多いように思われ

10　本節は全体として拙著『タタールのくびき―ロシアにおけるモンゴル支配の研究』東京大学出版会、2007年に依拠している。

る。日本においても、とくに東洋史畑の研究者を中心に、このように主張されることが多い[11]。早くはK. マルクスが、モスクワはモンゴルのおかげで国家統一をはたし、周囲を圧倒する強国となることができたとする見方を明らかにしていた。かれによれば、モスクワ国家建国の立役者イヴァン一世カリター（大公1325-41年在位）は「タタールの絞刑吏、追従者、奴隷頭」であり、タタールすなわちモンゴルから「簒奪する奴隷のマキャベリズム」を学んだという。そして「モンゴル奴隷制の血なまぐさい汚辱がモスクワ国の揺籃を形づくり、現代ロシアはモスクワ国の変身にすぎない」とまで記す[12]。

はたしてこのような見方は現実を正確に反映したものといえるであろうか。

たしかにモスクワが自国の強化のために他の諸公国以上にモンゴル支配を効果的に利用したことは事実とみなしうる[13]。しかし本稿の筆者の考えでは、モスクワがロシア諸公国を傘下に収め強力な国家を創出することができたのは、ほかならぬモンゴル支配に抗してのことであり、それと戦い、支配を撥ね退けることによってなのである。支配自体はロシアにとってあくまでも「くびき」であり、桎梏にほかならなかったと考える[14]。

これとの関連で、モスクワがモンゴル支配後その継承（後継）国家となったとされる場

11　日本の場合、岡田英弘『世界史の誕生』（筑摩書房、1992年）や杉山正明『クビライの挑戦』（朝日新聞社、1995年）などが代表的である。

12　マルクス（石堂清倫訳）『18世紀の秘密外交史』、三一書房、1979年、112-115頁。田中陽兒「モスクワ国家論の一類型」はマルクスのこの著作が各種マルクス・エンゲルス全集に収録されなかった事情をはじめ、こうした見解のもつ問題性について鋭く論じている（田中『世界史学とロシア史研究』山川出版社、2014年所収。論文の初出は1967年）。

13　このことはとりわけ14世紀前半の北東ロシアの支配権（「ウラジーミル大公位」）をめぐるモスクワとトヴェーリ間の抗争に関して述べうることである。筆者はかつてモスクワ強大化の主要な要因としてモスクワ諸公の「高い政治的力量」をあげたことがある。その際とくに念頭においていたのは、モスクワがキプチャク・カンの矛先を、当時国内で最強であったトヴェーリに向けるよう画策し、その追い落としに成功したことである。ただしこれをマルクスのごとく、たんにモンゴルに対するモスクワの卑屈な態度によって説明することはできない。モンゴルには自己の対ロシア政策が明白にあり、モンゴルがモスクワに常に一方的に肩入れしたわけではなかったからである。当時の国際情勢、とりわけ西方リトアニアの存在、また大公権と正教会との関係なども考慮に入れつつ慎重にモンゴルの対ロシア政策を見究める必要があるのである。拙稿「モスクワ大公国の成立と発展」（『世界歴史体系　ロシア史　Ⅰ』、山川出版社、1995年、166-169頁）。

14　これとの関連で、モンゴル支配がロシアにとって確かに「くびき」、つまり「桎梏」であり「災難」であったかどうかの、すなわち「タタールのくびき」という用語の適切性の問題があることにも留意する必要がある。これについては、拙著『タタールのくびき』「はしがき」および第七章、また拙稿「＜ロシアとモンゴル＞覚書」『西洋史論集』（北海道大学文学研究科西洋史研究室）、11（2008年）、28-37頁を参照されたい。なお「タタール」はルーシ史料（諸年代記等）においてモンゴル人とその配下にあったステップ諸族を指した通常の史料用語であるが、本稿では「モンゴル」とほぼ同義で用いている。

合もある[15]。こうした主張をする歴史家も多いが、その代表はロシア革命後「ユーラシア主義」の立場を提唱した一部の亡命史家であろう。たとえば、アメリカのロシア史研究の基礎を築いたといわれる G. ヴェルナツキーによれば、ロシアはモンゴル時代に「農奴制に基盤をおく専制国家となった」が、それは「自らの生存のために支払われなければならなかった代償であった」という。晩年のヴェルナツキーは他の「ユーラシア主義者」とはやや異なり、モンゴル支配をロシアにとって必ずしも「恩恵」と考えたわけではないが、モンゴル支配が専制と農奴制を基盤におくモスクワ国家を作り出したとみるのである[16]。

近年のアメリカの研究者 D. オストロウスキもモスクワ・モンゴル継承国家論を新たな視点から提唱する。かれによれば、初期モスクワ大公国（14-15世紀）の政治・軍事制度はキプチャク・カン国のそれに酷似しており、モスクワが後者からこれを模倣・採用したと考える必要があるという[17]。詳細についてここでは立ち入らないが、筆者の考えでは、こうした見方を史料的に裏付けることはほとんどできない。初期モスクワ国家制度に関するオストロウスキの見解は史料の証言力をはるかに超えて恣意的に構築されている。ひとつだけ例をあげると、かれは初期モスクワの貴族会議の構成員を４人とみ、これはカン国の４人のカラチ・ベイ（qarachi bey）を構成員とする国事会議に相当すると記す。モスクワはカン国の国事会議をそっくりそのまま模倣したというのである。しかしながらモスクワの、とくにその初期の貴族（boiare）を安定した身分とみることはできないのであり、それゆえたとえ有力者に限定したとしても、その数が４人などと固定的、確定的に考えることはまったく無理なのである[18]。

15　モスクワ・モンゴル継承国家論と本稿の筆者の見解については、拙稿「＜ロシアとモンゴル＞覚書」42-59頁参照。

16　ロシア革命後の亡命者たちによるいわば本来の歴史的「ユーラシア主義」については、浜由樹子『ユーラシア主義とは何か』成文社、2010を参照。厳密にいえば、革命直後の亡命者とその後の者を区別して考える必要がある。モンゴル支配との関連でいえば、初期ユーラシア主義者の代表は、N.Trubetskoi, *Nasledie Chingiskhana.* Berlin, 1925や G.Vernadskii, Dva podviga sv. Aleksandra Nevskogo. *Evraziiskii Vremennik. Utverzhdenie evraziitsev.* Kn. 4, Berlin, 1925, s.318-337などが、後代の代表としては G.Vernadsky, *The Mongols and Russia.* Yale University Press, 1953, p.333-390 や、ソヴィエト時代に「ユーラシア主義」を復活させたと言われる思想家グミリョフ（L.N.Gumilev, *Drevniaia Rus'i Velikaia Step'.* M., 1989など）があげられる。ヴェルナツキーはアメリカに渡ってからの著書では本稿で紹介したように若干態度を変えている。またグミリョフの見解については、拙著『タタールのくびき』106-111, 191-202頁を参照。

17　D.Ostrowski, *Muscovy and the Mongols. Cross-cultural influences on the Steppe Frontier. 1304-1589.* Cambridge University Press. 1998, p.36-63, 135-148.

18　モスクワ時代史の権威 A. A. ジミーンは、やや時代は下るが、16世紀前半の38年間にわたる貴族会議出席者数の一覧表を作成している。それによれば、会議への参加者（これが本来の貴族である）は年度によって４人から15人の間を変動している。このことは貴族身分や貴族会議の構成がこの時期にいたってもなお固定的でなかったことを示している。A.A.Zimin, *Formirovanie boiarskoi aristokratii v Rossii vo vtoroi polovine XV- pervoi treti XVI v.* M., 1988, s.290-291

初期モスクワ諸公がモンゴル支配を「恩恵」と捉えていたとするのも、既述のごとく受け入れがたい。モンゴル人はバトゥ以後も頻繁に侵入し甚大な被害を与えたのみならず[19]、かれらが樹立した徴税・徴兵体制もロシア人にとっては桎梏（「くびき」）にほかならなかった。この時代の年代記や近代のロシア史家が、ロシアの蒙った「被害」の程度を誇張していると主張する研究者は多い。被害者が自ら蒙った損害について誇張する傾向のあるのは確かだろう。しかしだからと言って逆に、これを過小に評価したり、あたかも被害はなかったとしたり、いわんや支配が「恩恵」であったなどとするのはもっと問題であろう。「被害」の程度については、言うまでもなく事実資料に基づいて可能な限り客観的に見積もる必要がある。筆者もかつてこの問題にふれたことがあるが[20]、ここでは一例としてドイツのC. ゲールケの研究をあげておきたい[21]。それによれば、13世紀に存在を確認できる居住地（集落）のうち、バトゥ軍侵入後ほぼ半分が存在を止めたことが史料的に推測できるという。具体的には、北東ルーシの場合33-50%、南部および南西ルーシの場合50-66%の居住地が廃墟と化したと見積もられている。ゲールケはそこから13世紀を「大荒廃期」とよび、その主要原因を「タタールの侵入」に求めているのである。

またオストロウスキは、モンゴル支配下のロシア人自身が少なくとも初めのうちは支配を「くびき」とは認識していなかったと主張したが、かりにそうであったとしても、それは支配が「恩恵」であったからではなく、「間接的」であったことによって説明されるべきであろう。すなわち、モンゴルの二世紀半にわたるロシア支配は、中国（元朝）などにおける場合とは異なる性格を有していたのである。キプチャク・カン国創建の際にヴォルガ下流域にとどまったモンゴル人の数はきわめて少なかったと考えられ（バトゥ征西軍の大部分はモンゴル高原へ帰還した）、バトゥとともに残ったモンゴル人も北方ロシアへ移り住んだわけではなかった。モンゴルはロシアを直接支配する態勢になかっただけでなく、そもそもそのような意図をもっていなかったと考えられる[22]。カンははるか遠方のサ

19　なかでも1252年の「ネヴリュイの侵入」や1293年の「デュデンの侵入」などが甚大な被害をもたらしたことでよく知られているが、ソヴィエトの研究者V.V.カルガーロフによれば、13世紀最後の四半世紀だけで侵入は15回に及んだという。つまり諸年代記がそれだけの侵入について記述しているのである（V.V.Kargalov, *Vneshnepoliticheskie factory razvitiia feodal'noi Rusi. Feodal'naia Rus'i kochevniki.* M., 1967, s.193）。またフランスのロシア中世史家A.エックは二世紀半にわたるモンゴル支配期にロシア・タタール（モンゴル）間に45回の戦争・軍事衝突があり、モンゴルの侵入事例については無数であったと記す（A.Eck, *Le moyen age Russe.* Paris, 1933, p.59）。いうまでもなくこうした事例はさらに増やすことができる。

20　拙著『タタールのくびき』、とりわけ第七章。

21　C.Goehrke, *Wüstungen in der Moskauer Rus'. Studien zur Siedlungs-, Bevölkerungs- und Sozialgeschichte.* Wiesbaden, 1968; Goehrke, Wüstungsperioden des frühen und hohen Mittelalters in Osteuropa. *JbfGO.* 16 (1968), S.9-52

22　キプチャク・カン国創建時のモンゴル人の数について伝える史料は存在せず、その実数は明らかにしようもない。モンゴルのロシア支配を「くびき」とみなさない論者は概して、バトゥ征西軍の、

ライから、ロシアの重要拠点に派遣したバスカクを通じてこれを支配する形になった。その際バスカクは小部隊を伴っていたと考えられるが、あくまでもルーシ諸公に対する一種の「目付け役」にとどまり、ロシア人住民を長期にわたり力で押さえつけておくことはできなかった。支配自体は在地諸公を介して行われたのである[23]。その結果、モスクワがモンゴルから受けた影響は軍事、財政（徴税）、刑法など限られた分野にとどまり、宗教的・精神的側面にまで及ぶことは少なかったと考えられるのである[24]。

一方、この時代にロシア正教が広く国の隅々にまで、また深く人々の心の中にまで浸透したことにも留意すべきである。モンゴル支配時代は一見逆説的に見えるが、ロシアにおいて修道制が発達した時代としても知られている。バトゥ軍侵入後しばらく続いた破壊と混乱の時代は別にして、その後の14-16世紀に、共住生活を基本とする新しいタイプの比較的大規模な修道院が150も創建されたことが指摘されている。セルゲイ・ラドネシュキーなど多数の聖人の出現したことも注目される。その背景には、分裂し、弱体化した諸公権力とは対照的に、ロシア正教会が国全体を束ねる一体的な組織であり続け、その意味で自己の存在意義を高めたことがあった。また苦難の時期であったことはロシア人の内なる精神的宗教的覚醒を呼び起こしたとも考えられる。そしてモンゴルの宗教政策が穏健（「寛容」）であったことも、支配自体が間接的であったことと合わせてこうした展開を可能としたように思われる[25]。

またカン国創建時にバトゥとともにヴォルガ川下流域にとどまったモンゴル人の数を低く見積もる傾向にある。たとえばグミリョフなどは、バトゥにはモンゴル戦士（騎士）が四千人しかいなかったとか、「八百万の東ヨーロッパ人」（つまりロシア人）に君臨したモンゴル人は「四千人」に過ぎなかったとしている（Gumilev, *Drevniaia Rus' i Velikaia Step'*. s.529, 543）。この数字は典拠が示されておらず、根拠薄弱でそのまま受け入れることはできないが、少なくともグミリョフが、モンゴル人が大挙ロシアに移住し、これを直接的に支配したとみていないことは明らかであろう。筆者もこの点ではグミリョフは正しいと考えている。

23　バスカク制など支配の実際をめぐる問題については、拙著『タタールのくびき』第二章をみられたい。

24　このうち筆者はとくにモンゴル法の影響の問題を検討したことがある。拙稿「中世ロシアの法文化とモンゴル支配」『中世ロシアの法と社会』（スラブ研究センター『研究報告集』24, 2008年, 1-24頁）。筆者はこの面でも影響の過大評価は慎むべきであると考えている。

25　I.U. Budovnits, *Monastyri na Rusi i bor'ba s nimi krest'ian v XIV-XVI vv.* M., 1966, s.357-363. この時期のロシア正教会の状況については、*Russkoe pravoslavie. Vekhi istorii.* M., 1989, s.68-94、また N.A. Okhotina, Russkaia tserkov' i mongol' skoe zavoevanie（XIII v.）//*Tserkov', obshchestvo i gosudarstvo v feodal'noi Rossii.* M., 1990, s.67-84などが簡にして要を得た分析を行っている。またモンゴルの対ルーシ宗教政策については、Iu.K. Belozerov, *Religioznaia politika Zolotoi Ordy na Rusi v XIII-XIV vv.* Avtoreferat dissertatsiia na soiskanie uchennoi stepeni kandidata ist. nauk. M., 2002が参考になる。

Ⅳ　モスクワ大公国の時代（14/15-17世紀）―「モスクワ・モンゴル継承国家論」の是非

15世紀後半から16世紀にかけてモスクワ大公国は国内統一を終え、モンゴル支配を脱して東部ヨーロッパの大国としての歩みを始める。この時期のモスクワをもモンゴルの継承国家とみる論者は少なくない。というよりイヴァン雷帝期のモスクワ国家こそがその典型であったと考える者が多い。

たとえば、すでにふれたオストロウスキは、よく知られたイヴァン雷帝の「ツァーリ」としての戴冠が（1547年）、モンゴル的な含意を有していたと主張する[26]。「ツァーリ」（ラテン語のカエサルに由来するロシア語である）は周知のごとくロシアでは最初「ビザンツ皇帝」を指す語であった。モンゴル支配の樹立後、それはキプチャク・カンをも表すようになり、ビザンツ帝国滅亡（1453年）後はもっぱらカンのことを指すようになった。モスクワではすでに雷帝の祖父イヴァン三世がこの称号を名乗ったことがあるが、正式な称号となるためにはやはり雷帝の戴冠式を待たなければならなかった。はたして雷帝は「ツァーリ」をモンゴル的な意味で理解していたのであろうか。オストロウスキがとくに注目するのは、戴冠後の雷帝の行動や政策である。まず1552年モスクワ軍は三度にわたる激戦の末にヴォルガ川中流域のカザン・カン国を征服した。若きツァーリ自身が出陣しカザン入城を果たした。1556年には下流域のアトラハン・カン国をも併合した。オストロウスキによれば、両カン国への攻撃と併合は雷帝が自身をキプチャク・カンの後継者と自覚していた証拠である。雷帝は自身が東方諸民族・国家に君臨する皇帝であるとする認識を内外に誇示したのである。雷帝はその後、東方諸民族が雷帝などモスクワのツァーリを指して呼んだという「白いツァーリ」の称号をも自ら採用する。かれはまたチンギス・カンの子孫を含むタタール王族を臣下として積極的に受け入れたが（このようにしてカシモフ・カン国などが創設された）、このこともモスクワのモンゴル化を大きく促進した。雷帝はさらに晩年の1575年には、チンギス・カンの直系といわれるサイン・ブラート（ロシアでは正教への改宗後シメオン・ベクブラートヴィチと呼ばれた）に一時「帝位」を譲り、ほぼ一年後に復帰するという特異な行動にでるが、この譲位はかれが「チンギス統原理」を知っていたことを物語っているという[27]。

はたしてこうした主張は受け入れられるであろうか。筆者の考えでは、雷帝の戴冠をとくに東方との関連で理解しようとすることに確かな根拠はない。まず雷帝にそうした自覚があったことを明確に示す史料は知られていない。かれは多くの著述を残しているが、その「ツァーリ」としての自覚をもっともよく表現している既述の「クールプスキー公への

26　Ostrowski, *Muscovy and the Mongols.* p.181-184

27　モスクワのツァーリがチンギス統原理に通じていたと、とくに主張するのは、J.Miyawaki, The Chinggisid Principle in Russia. *Russian History.* I-4（1992）, p.261-277である。

書簡」をみると、かれが自身をもっぱらキリスト教的専制君主と認識していることは明らかである[28]。モスクワ政府は戴冠後新称号の承認を求めて広く諸外国に使節を派遣し粘り強い交渉を進めたが、その相手はほとんどが西方キリスト教諸国である[29]。あたかも西方諸国しか念頭になかったかのごとくである。また史料は1547年の戴冠式自体がビザンツ・モデルに従って、正教会の理念的指導の下で執り行われたことを証言している[30]。

カザン、アストラハン両カン国の併合も、モスクワがモンゴルの継承国家となったことを意味してはいない。むしろそれは正教国家によるイスラーム国家の征服とみるべきで、雷帝は一貫して正教徒ツァーリとして両カン国に君臨しているのである[31]。

東方諸民族がモスクワの皇帝を「白いツァーリ」と呼んだとされる問題、および雷帝によるシメオン・ベクブラートヴィチへの譲位問題については、ここでは立ち入らない。筆者もすでに不十分ながら論じたことがあるからである[32]。ただここで要点のみを記しておくと、近年「白いツァーリ」という呼称は必ずしも東方に固有のものではなく、むしろ西方に起源を有し、東方諸民族はこれをモスクワを介して知った可能性が高いという指摘がなされている[33]。つまりモスクワの「ツァーリ」をモンゴルのカン（あるいはカアン）と結びつける重大な論拠の一つが揺らいでいるのである。シメオン・ベクブラートヴィチへの譲位も、必ずしもチンギス統原理から説明する必要性はないようにみえる。この譲位がモスクワ国家とステップ諸民族との密接な関係を示唆するものであることは言うまでもない。しかしながらこれをモスクワ・モンゴル継承国家論の範疇で理解することには無理がある。シメオンが抜擢されたのは改宗して正教徒となってからのことであり、信頼すべき史料は、譲渡されたのが「帝位」つまりツァーリの位や称号ではなく、「大公位」であったことを一致して示しているのである。雷帝は大公位を手放した後もツァーリとしての実権を握り続けており、シメオンはやがて雷帝の命で何事もなかったかのように退場させられたことが指摘されている[34]。

28　拙訳「イヴァン雷帝とクールプスキー公の往復書簡（I-III）」

29　拙稿「『ウラジーミル諸公物語』覚書」『スラブ研究』24（1979）、37-38頁

30　戴冠式の「式次第」の史料状況、さらに式の歴史的意味については、さしあたり D.B.Miller, The Coronation of Ivan IV of Moscow. *JbfGO.* 15（1967）, p.559-574を参照。ミラーは戴冠式が府主教マカーリーとロシア正教会の発意と指導の下に挙行されたことを強調する。

31　イヴァン雷帝のモスクワ国家によるカザン征服後の統治については、さしあたり、拙稿「モスクワ国家のカザン支配―モスクワ国家によるカザン統合の初期段階」『北海道大学文学部紀要』41-2、1992年、79-139頁、さらに T.Kuryuzawa, Kazan after 1552--The Rebellion of 1552-1557（“Kazan War”）and the Muscovite State. in: *Urbanism in Islam.* The Proceedins of the International Conference on Urbanism in Islam（ICUIT）, Oct. 22-28, 1989, Tokyo. Supplement. Tokyo, 1989, pp.1-49を参照。

32　拙稿「＜ロシアとモンゴル＞覚書」44-56頁。

33　Ch.J.Halperin, Ivan IV and Chinggis Khan. *JbfGO.* 51（2003）, p.481-497. とくに V.V.Trepavlov, ≪ *Belyi Tsar'* ≫ *Obraz monarkha i predstavleniia o poddanstve u narodov Rossii XV-XVIII vv.* M., 2007, s.13-56

34　シメオン・ベクブラートヴィチについてはすぐれた邦語論文がある。石戸谷重郎「シメオン大公

以上にみたように、モスクワはカザン、アストラハン両カン国の併合以後「ユーラシア」帝国への道を歩みだしたようにみえるが、これはロシア人が正教徒として独自の文化と価値観を携えて東方へ進出したとみるべきものである。ロシアは確かに「ユーラシア化」した。しかしこれをただちに「モンゴル化」、「アジア化」と同一視すべきではない。何よりもロシア人のアイデンティティの在処に本質的、根本的な変化がおきたわけではなかった。むしろ以下に示されるごとく、「ロシアとヨーロッパ」はモスクワ時代においても根本問題であり続けたのである。

すなわち、モスクワは15世紀中ごろから国家として大きく成長を遂げ（内戦の終結、国内統一の完了、コンスタンティノープル総主教座からの自治的ロシア教会の成立、「タタールのくびき」の廃棄、大公権の専制化、農奴制の成立、「モスクワ・第三ローマ理念」の出現等）、強力な国家を形成してゆくが、それとともに長い間途絶えていたヨーロッパ諸国との関係・交流が復活し、それは急速に拡大する傾向を示した。詳細は省略するが、いくつかの事例にふれておこう。

まずイヴァン三世（大公在位1462-1505年）はビザンツ最後の皇帝の姪ゾエ（モスクワではソフィヤと呼ばれた）を妃に迎えるが（1472年）、婚姻成立に際してはローマ教皇庁が決定的な役割をはたした。ゾエはビザンツ帝国滅亡後、教皇庁の庇護を受けていたのである。ゾエのモスクワ入りには多くのギリシア人、イタリア人が付き従っていたが、このころからヨーロッパ各地から各種専門家、技術者が多数モスクワに到来し、大公の宮廷を中心に重要な役割を果たした。モスクワ・クレムリの建築（城壁、ウスペンスキー聖堂、グラノヴィータヤ・パラータなど）は、とくにルネサンス期イタリア職人の指導の下に行われた。交流は西方からなされるのがもっぱらであったが、モスクワ側も15世紀後半だけで11回の使節団をイタリア各地へ派遣したことが知られている。多くは建築、武器製造、医師、軍人等の専門家を徴募する目的からであった。このような傾向はイヴァン雷帝期にいたってさらに強まり、1553年にはイギリス人が北極海―白海航路を開拓（イギリス船アドベンチャー号の白海沿岸漂着）、ポーランドやスウェーデンによって阻まれていたバルト海航路に代わって、やや遠回りで危険ではあったが、西方との新たな交易路をロシア人に提供した。２年後の1555年にはロンドンで「モスクワ会社 Muscovy Company」（「ロ

期におけるイヴァン雷帝のインムニテート政策」『奈良産業大学紀要』1（1985年）、1-23頁；石戸谷重郎「イヴァン雷帝とシメオン＝ベクブラトヴィチ」『奈良文化女子短期大学紀要』16（1985年）、1-20頁。石戸谷は、シメオンが在位した一年ほどの間にかれの名によって出された文書14通を分析し、かれが一度として「全ルーシのツァーリ」と呼ばれたことのなかったことを確認している。またモスクワ国家におけるタタール勤務人の役割の重要性について一定の理解を示す石戸谷ですら、シメオンのことを「全ロシアの大公位に就いた人物としては、まことに印象が薄く」、雷帝の「影武者的存在」に過ぎなかったと評し、譲位が何らかの意味のある重大な措置であったとは考えられないとしている。

シア会社 Russia Company」ともいう）が立ち上げられ、英露間に直接的交易関係が樹立される。かくて16世紀後半にはモスクワ在住西洋人の数も増え、モスクワには「ドイツ人村（外国人村）」も成立する。それは17世紀には「新外国人村」となり、さらに居住者数を増やし（世紀後半の最盛期には1500人に達したという）、若きピョートル一世がこれに足しげく通って、西方事情や風俗慣習、何よりも進歩的技術を学んだことはよく知られている[35]。

モスクワはけっして「ヨーロッパ」から切り離された存在ではなかったのである。

V　展望

ロシアの近代化（西欧化）は、上述のごとく、モスクワ大公国の時代から進められていた。しかしこれを目に見える形で劇的に推し進めたのは17世紀末に登場するピョートル一世であった。ピョートルは急速かつ広範な近代化による強国化を図り、北方戦争（1700-21年）に打って出てバルト海域に君臨していたスウェーデンを破り、それにより元老院から「皇帝インペラートル」の称号を贈られた。ロシアは文字通り「帝国」として国際舞台にその威容を現すこととなった。

その後に続く帝政ロシアが、「ロシアとヨーロッパ」という表題の下に語られるのにもっともふさわしい時代に入ったことに疑問の余地はない。このことは啓蒙専制君主として名高いエカチェリーナ二世を想起するだけで十分であろう。かの女は自らアンハルト・ツェルプスト侯家生まれの生粋のドイツ人であり、ロマノフ朝の女帝となった後はロシアのヨーロッパ化を積極的に推し進めたのである。かの女が嫁いだピョートル三世も父親がドイツ人で（ホルシュタイン・ゴットルプ公。母はピョートル一世の娘アンナであった）、14歳のときに帝位継承者としてロシアにやってくるまで、ドイツ（キール）で過ごしたこともあって、「半ば以上」にドイツ人であった。

ただし同じく「ロシアとヨーロッパ」といいながら、既述のごとく、次第にその内実に変化が現れてくるのも事実である。すなわち、当初は前代までと同様にロシアはヨーロッパから多くを摂取し、それに範を仰ごうとした。もちろんこのころにはすでに決定的と

35　この時期のモスクワとヨーロッパとの関係･交流については､さしあたり以下を参照。S.F.Platonov, *Moskva i Zapad.* Berlin, 1925; V.A.Malinin, *Rus'i Zapad.* Kaluga, 2000; T.S.Willan, *The Early History of the Russia Company. 1553-1603.* Manchester University Press, 1956; E.Amburger, *Die Anwerbung ausländischer Fachkräfte für die Wirtschaft Rußlands vom 15. bis ins 19. Jahrhundert.* Wiesbaden, 1968; E.Donnert, *Rußland an der Schwelle der Neuzeit. Der Moskauer Staat im 16. Jahrhundert.* Berlin, 1972; Alpatov M.A. *Russkaia istoricheskaia mysl'i Zapadnaia Evropa XII-XVII vv.* M., 1973; D.W.Treadgold, *The West in Russia and China. Religious and Secular Thought in Modern Times.* Vol.1. Russia, 1472-1917. Cambridge University Press, 1973；拙稿「モスクワの外国人村」、『人文研究』（小樽商科大学）69（1985年）、1-27頁。

なっていた正教とカトリックとの対立はあった。しかし急速に強国化した後も、さしあたりヨーロッパから技術面を中心に多くを取り入れようとする態度に変化はなかった。むしろロシアは近代になって「古き良きヨーロッパ」の擁護者として重きをなした。フランス革命後、エカチェリーナ二世は多くの亡命者をかの地から受け入れ、アレクサンドル一世は「古きヨーロッパ」を破壊しようとしたナポレオンの前に立ちはだかり、戦後のウィーン体制下では「神聖同盟」を提唱して正統主義的「ヨーロッパ」を復活させようとした。後を継いだニコライ一世に至っては「ヨーロッパの憲兵」とまで呼ばれることとなる。

変化が明らかになるのは、おそらくクリミア戦争（1853-1856年）後のことであろう。ロシアはヨーロッパの主要勢力と真っ向から対立することになった。しかし戦争の敗北によりさらなる変質には歯止めがかかる。

思想史上も類似の展開がみられる。19世紀中ごろの「スラヴ派」対「西欧派」の論争においては、両派は対立しつつも、ともにロシアをヨーロッパの一部（ないし一部であるべき）と考えていたことに疑いはない。そのうえで、いかなるヨーロッパ的な道を辿るのがよいかが論争されたのである。しかしながら次第に「ヨーロッパ」に対する疑念が強まる。1848年革命挫折後のヨーロッパを体験したA. ゲルツェンはやがて「ロシア社会主義」に傾き（農村共同体への注目）、後のナロードニキ主義に道を開く。思想面でもヨーロッパ離れが始まったのである。「ロシアとヨーロッパ」が「ロシアかヨーロッパか」へと変質し始める。

20世紀10年代からは、ロシア革命を民衆の力の発現とみた者たちのなかから、民衆のロシアが、危機に陥った西欧文明の呪縛から逃れ、独自の道を歩みだすとする立場（「スキタイ主義」）が現れる。思想家イワーノフ＝ラズームニクや詩人エセーニン、ブロークらがその提唱者である。「ロシアかヨーロッパか」への変質は本格的な段階を迎えたと言ってよい。

十月革命後の20世紀20年代には、亡命知識人のなかから「ユーラシア主義」の主張が行われる。かれらはいっそう強く脱ヨーロッパを志向する。そのうちN.S. トルベツコイ『ヨーロッパと人類』は「ヨーロッパ」に対するロシア人中心の「全人類」の闘争を呼びかける[36]。これは「ロシアかヨーロッパか」を「ユーラシアかヨーロッパか」という形で完成させたものと言える。ただしこれを「ロシア対ヨーロッパ」とまで言うことはできない。その萌芽にすぎないと考えられる。というのもトルベツコイ（あるいは初期ユーラシア主義者）にあっては同主義が「思想的」に十分な展開をみせたとはいえないからである。この段階では「脱ヨーロッパ」の主張にとどまっていると考えられる。トルベツコイの別の著述『東方への脱出』は[37]、一見積極的、具体的に「脱ヨーロッパ」を図ってい

36　Trubetskoi N.S. *Evropa i chelovechestvo.* Sofiia, 1920. これは早くも1927年には邦訳されている（島野三郎訳『西欧文明と人類の将来』大正15年、行地社出版部）。

37　Trubetskoi N.S. *Iskhod k Vostoku.* Sofiia, 1921

るようにみえるが、その実、受身的、抽象的である。先へ進むことを主張しつつも、実際には、後退的、拒絶的態度のままである。その主旨がヨーロッパからの「脱出」におかれていることは明らかである。その後の展望については抽象的にとどまっていると考えられる。

いずれにせよ、この時点でのロシアに、脱出後の「対決」を現実的に可能とする力（国際政治的な力量）が欠けていたことは決定的であった。そうした条件が整うのはまだ先のことであった。

おそらく「ロシア対ヨーロッパ」は、とりわけ国際政治的次元で考慮されるべき観念であろう。それは、ソヴィエト政権が成立して以降、とりわけ第二次大戦後の冷戦時代に具現化したといえる。ソヴィエト政権は思想的にも、ヨーロッパとは異質の社会と国家の建設を希求し、それを政治・経済・軍事的に推し進めようとした。その意味でそれはまさに十月革命の帰結であり、人類史上新たな実験であった。またこれと同時に留意すべきは、自国が常時敵対勢力によって包囲されているとする意識が、とりわけソヴィエト時代に強く醸成されたことである。こうした意識は最古の時代からステップ世界との対立に明け暮れ、13世紀以降はこれに加えて西方カトリック圏とも激しく対立するに至ったロシアに、早い段階で芽生えていたが、決定的なのはおそらく両世界大戦時の、とりわけ革命後の干渉戦争や第二次大戦時のナチス・ドイツとの戦いの経験であったろう。そこで蒙った甚大な被害が、ロシアをして諸外国、とりわけ西方からの敵対勢力に対する過剰なまでの防衛力増強に拍車をかけさせることとなったと考えられる。「ロシア対ヨーロッパ（欧米、西洋）」はこうしてロシア人の心に一種のトラウマとしてあたかも生得的に根差しているかのごとくになったのである。

今日のロシアも「ヨーロッパ」（欧米）との対決を志向する点で、その延長線上にあるとみることができる。ただしそれは独自ではあっても、必ずしも異質の、特殊な社会を築こうとしているわけでないことも確かであろう。その意味でソヴィエト期の対立図式とはいささか位相を異にしているとみるべきであるようにみえる。

「ロシアとヨーロッパ」は、以上のような意味で、今日においても旧くて新しい問題であり続けていると考えられる。

キーワード　「ルーシ（ロシア）とヨーロッパ」、正教とカトリック、「ロシアとアジア」、「タタールのくびき」、「モスクワ･モンゴル継承国家論」、ドイツ人（外国人）村、ユーラシア主義

（KURYUZAWA Takeo）